

ヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』にみる聾語彙：中 近世移行期における葡語と倭語の言語接触

末森, 明夫
日本社会事業大学

<https://doi.org/10.15017/7343674>

出版情報：障害史研究. 7, pp.1-13, 2025-03-25. 障害史研究会
バージョン：
権利関係：



ヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』にみる聾語彙：

中近世移行期における葡語と倭語の言語接触

Words Related the d/Deaf in the *Portuguese-Japanese Dictionary* in a Collection of the Vatican Apostolic Library:

Language contact between Portuguese and Japanese in the medieval-modern transition period

末森 明夫
Dr. SUEMORI Akio

(日本社会事業大学)
(Japan College of Social Work)

要 旨

本稿は17世紀に南蛮通詞（＝日本人）の葡語学習のために編まれたヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』にみる葡語 [mouco（聾）] と倭語 [tçu'bō (=tsumbo)] を焦点化し、両語彙にみる共時的ないし通時的位相を考察した。葡語 [mouco] は16世紀以前の葡語史料にはほとんどみえないものであり、葡語 [surdo] よりも口語の色合いが濃いものと考えられる。一方、『葡日辞書』にみる倭語 [tçu'bō] も中世近世移行期日本史料にみる最初期用例であり、倭語 [mimixij] や [qicazu] よりも口語の色合いが濃いものと考えられる。すなわち、『葡日辞書』では他の聾語彙よりも口語の色合いが濃いものと考えられる葡語 [muco] と倭語 [tçu'bō] が対応づけられたところに、17世紀に編まれた葡語学習者を対象とする葡日対訳辞書にみる言語接触の特性が窺われる。

ABSTRACT

This paper analyses synchronic and diachronic aspects of Portuguese [mouco] and Japanese [tçu'bō] in the Portuguese-Japanese Dictionary in a collection of the Vatican Apostolic Library, which was compiled for Japanese interpreters' learning Portuguese in the 17th century. The Portuguese [mouco] is almost invisible in Portuguese archives before the 16th century, suggesting that [mouco] is considered to be more colloquial than Portuguese [surdo]. Similarly, the Japanese [tçu'bō] in the dictionary was very beginning example in Japanese documents in the medieval-modern transition period, suggesting that [tçu'bō] is considered to be more colloquial than Japanese [mimixij] or [qicazu]. Hence, an editor of the Portuguese-Japanese Dictionary made the colloquial Portuguese [mouco] correspond with the colloquial Japanese [tçu'bō], indicating a character of language contact between Portuguese and Japanese found in the dictionary.

1. はじめに：聾語彙史にみる言語接触

昨今の日本にみる聾・聴覚障害共同体では、『聴覚障害』という医学的概念を内包する語彙（以下、聾

語彙）として、「聾（ろう）」や「聴覚障害」の他に、英語 [deaf] に由来する借用語「デフ」も幅広く使われるようになっている。一方、「聾」⁽¹⁾ も、20世紀後期の戦略的本質主義の影響の下に、「手話言語を第一言語とする人」という社会言語学的概念をも内包

するようになるなど、語義が多分化している（山下2015）。このような聾語彙にみる共時的ないし通時的位相は、外来語との接触事象を含む普遍的、文化的、個人的様態が複雑に交絡している。

Rose (2013) は、古代ギリシア史料にみる聾語彙が医学的概念や社会言語学的概念が重層的かつ多面的な概念編制図式を内包していたことを述べている。

The Greeks perceived deafness as an intellectual impairment because of the difficulty in verbal communication that accompanies deafness. The obsolete expression “deaf and dumb” is an apt description of the way in which a deaf person was perceived in ancient Greece. (Rose 2013 : 17)

An examination of the term “deaf” (κωφός) reveals both that the term was flexible in its range of meanings, and that deafness was inextricably intertwined in Greek thought with an impairment of verbal communication. Next, I discuss the Greek medical understanding of deafness, as well as medical and nonmedical treatments for deafness in terms of how they illuminate Greek attitudes toward deaf people. Finally, while attitudinal subtleties are lost, we can determine broad cultural assumptions that shaped the realities of hearing-impaired people. (Rose 2013 : 17)

また、末森・新谷 (2015)、末森・高橋 (2016、2017)、末森 (2015、2018a、2018b、2018c、2018d、2018e、2020a、2020b、2023、2024) は、中古中世日本史料（字書、韻書、辞書、医書、キリシタン版）にみる聾語彙や啞語彙を編輯し、聾語彙や啞語彙にみる形式・意味の重層性や多面性を詳らかにした：(1) 聾語彙は古代から近世に至るまで、一時的ないし常態的な《聴覚障害》を意味するものに留まり、《発声障害》や《知的障害》という医学的概念を内包することはほとんどなかった、(2) 「聾啞」のような聾語彙と啞語彙の複合化が窺えるようになるのは近世以降である。ところが、中近世の欧米諸国では、聾語彙と啞語彙ないし知的障害関連語彙との形式・

意味の区別がかなり曖昧であり (Norri 2016)、中近世日本にみる聾語彙とは異なった位相が窺える。

なお、末森・新谷 (2015) や末森ほか (2019) は、織豊時代・江戸時代初期のキリシタン版対訳辞書や江戸時代後期の蘭和辞書などにみる外国語聾語彙を編輯したものの、近代以前の日本にみる外国語聾語彙と日本語聾語彙の言語接触にみる相互作用には言及していない。日本語聾語彙史の拡充をはかるにあたり、外国語聾語彙と日本語聾語彙の言語接触を焦点化し、個々の聾語彙の変遷にみる固有性と通有性を可視化することが望まれる。その一環として、本稿はキリシタン版『葡日辞書』にみる葡語⁽²⁾ (= ポルトガル語) 聾語彙と倭語⁽³⁾ (= 中近世日本語) 聾語彙を焦点化し、個々の通時的ないし共時的位相を考察する。

2. 『葡日辞書』

16世紀後期から17世紀前期に渉る中近世移行期 (= 室町時代後期・織豊時代・江戸時代初期) の日本において、ポルトガルやスペインの宣教師たちは、日本語学習のために数多くの対訳辞書や日本語翻訳本（以下、キリシタン版）を刊行した（岸本・白井 2022）。その中にヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』⁽⁴⁾（以下、『葡日辞書』）という鈔本がある（京都大学文学部国語学国文学研究室 1999）。しかし、『日葡辞書』や『羅葡日辞書』をはじめとするキリシタン版対訳辞書に関する言説が汗牛充棟の趣をなしているにも拘らず、『葡日辞書』に関する研究は相当に限られている（森田 1975、安田 1991、岸本 1998、1999、斎藤 2001）。

岸本 (1999) は『葡日辞書』の成立年代と編纂指針に関し、次のように述べている。

成立は1603年から1714年までの間というおおよその推定にとどまり、辞書の内容からそれ以上の手がかりは見出だせていない。（岸本 1999 : 473）

この辞書は、棄教者の手によって成った可能性のある、キリシタン資料としての性格をもちながらも南蛮通事のポルトガル語学習のために書かれた、非常に特異な資料であるといえよう。

(岸本 1999 : 477)

1999 : 460)

『葡日辞書』は他のキリシタン版対訳辞書に比べると載録語彙は少ないものの、他のキリシタン版対訳辞書にはみえない葡語 [mouco] を窺うことができる。本章では『葡日辞書』にみる葡語 [mouco] やその周辺にある関連聾語彙の位相を記述する。

2.1. 『葡日辞書』にみる聾語彙

(1) 葡語聾語彙

『葡日辞書』の48vには、見出し語の葡語 [Mouco] と対訳語の倭語 [Tçu'bô] がみえる (図1)。さらに、男性形 [home mouco] と女性形 [mulher mouca] が記載され、[mulher mouca] には対訳倭語 [uonna tçu'bô] が当てられている。続いて、葡語のコピュラ動詞などが附された見出し語が記載されているものの、対訳語は記されていない。

岸本 (1999) は『葡日辞書』の現存状況に関し、次のように述べている。

本文は De. ante E. (2r) から始まり、R antes do. E. (89r~91r) で終わっているので、A~C、S~Z の部は全欠、D・R の部も有欠である。(岸本

『日葡辞書』や『羅葡日辞書』をはじめとする葡語対訳辞書には葡語 [surdo (聾)] が窺える。しかし、『葡日辞書』は [S] の部が欠けているため、[surdo] が載録されていたかどうかは判断できない。もっとも、かつては存在していたであろう完本『葡日辞書』の [S] の部には [surdo] が載録されていた可能性は低くはない。

なお、『葡日辞書』以外の葡語対訳辞書には、啞語彙の葡語 [mudo (啞)] がみえる (末森・新谷 2015)。しかし、『葡日辞書』の [M] の部にみる葡語 [Mudo] には、形容詞 [mudo] ではなく、動詞 [mudar] の対訳倭語 [Cayuru (換ゆる)] があてられており、啞語彙の倭語 [uoshi (啞)] を窺うことはできない (図2)。

(2) [mouco] の記載仕様

岸本 (1999) は、『葡日辞書』にみる見出し語に関し、次のように述べている。

辞書の形式は、ポルトガル語の見出し語一つに對して、一つないしは二つの日本語訳を付けるのが基本的なものである。(…) 動詞は、直接法

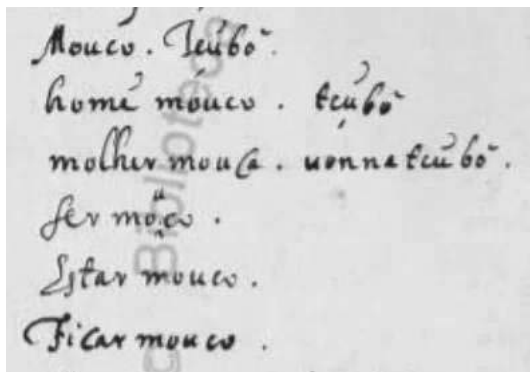


図1 『葡日辞書』にみる葡語 [mouco]

数字は葉数、『葡語辞書』は二段組で編集されており、向かって左側の段をa段、向かって右側の段をb段とする。aやbに続く数字は行数を示す。また、対訳倭語ラテン文字表記に続けて、翻字日本語を示す。翻字日本語は京都大学文学部国語学国文学研究室 (1999) による。

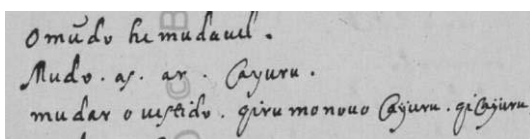


図2 『葡日辞書』にみる葡語 [Mudo]

Mouco. Tçu'bô. 聾 (48v-a6)

home' mouco. tçu'bô 聾 (48v-a7)

mulher mouca. uonnatcu'bô. 女聾 (48v-a8)

Ser mouco. (48v-a9)

Estar mouco. (48v-a10)

Ficar mouco. (48v-a11)

Mudo. as. ar. Cayuru. (49v-a10)

第一人称単数形現在・直接法第二人称単数形現在・原型の順に活用が示されている。多くの場合、続けて過去分詞形を示す。(岸本 1999 : 461)

葡語 [ser] [estar] [ficar] は、英語の be 動詞にあたるものであり、[ser] が比較的変わらない性質を示すのに対し、[estar] は一時的な状態や場所を示す。また、[ser mouco] や [estar mouco] が、「聾」という状態を表しているのに対し、[ficar mouco] は健康な状態から「聾」になる変化を表す。

(3) 対訳倭語聾語彙

岸本 (1999) は、『葡日辞書』にみる見出し語に関し、次のように述べている。

辞書の形式は、ポルトガル語の見出し語一つに対して、一つないしは二つの日本語訳を付けるのが基本的なものである。(岸本 1999 : 461)

『葡日辞書』以外のキリシタン版には、倭語 [tçu'bō] の他に、聾語彙の倭語 [mimitsubure (耳潰れ)]、[mimixij (耳癢)] や [qicazu/quicazu (聞かず)] がみえる (末森 2015, 2024)。しかし、『葡日辞書』では、見出し語の葡語 [mouco] の対訳倭語には [tçu'bō] のみが当てられており、[mimitsubure] [mimixij] や [qicazu/quicazu] は窺えない。また、[qicazu/quicazu] が他の葡語の対訳語に用いられている例もない。

(4) [tçu'bō] の綴り

岸本 (1998, 1999) は、『葡日辞書』にみる対訳倭語のローマ字綴りに関し、次のように述べている。

[オ] uo, vo [ツ] tçu [バウ] bō [ン] n, ' (鼻音符), m (岸本 1998 : 1)

日本語の綴りは、『日葡辞書』などに見られる日本イエズス会式のローマ字綴りをほぼ踏襲している。(岸本 1999 : 462)

図 1 にみる倭語 [tçu'bō] の綴りは、イエズス会

式ローマ字綴りに合致していることが窺える。もっとも、倭語 [uonnatcu'bō] にみる [uonna] は [n] が用いられているのに対し、[tçu'bō] は鼻音符 ['] が用いられており、「ん」のローマ字綴りに若干の揺らぎが窺える。

(5) [tçu'bō] の出現時期

岸本 (1999) は『葡日辞書』にみる倭語の地理的特性に関し、次のように述べている。

『葡日辞書』の日本語は、近世初期の西日本における口語を基準にしている。(岸本 1999 : 468)

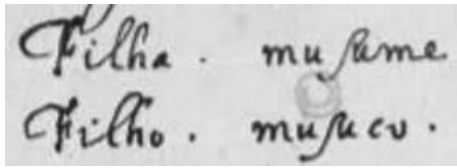
末森 (2024) は、中古中世日本史料にみる聾語彙を編輯し、日本語「ツンボ」の原型と考えられる倭語「ミミツブレ」⁽⁵⁾ が南北朝時代に編纂された医書『福田方』にみえること、室町時代に成立し改編を重ねてきた字書『倭玉篇』にも「ミミツブレ」が幅広くみえることを明らかにし、「ミミツブレ」の出現時期が南北朝時代に遡及し得るものと考えた。しかしながら、「ツンボ」は現存中古中世日本史料には窺えず (末森 2024)、江戸時代に幅広く用いられた辞書『節用集』などに散見する (末森・高橋 2016)。すなわち、「ミミツブレ」から「ツンボ」への変遷は中近世移行期に起きたものと考えられる。そのような類推の下に、17世紀に編まれた『葡日辞書』にみる [tçu'bō] は「ミミツブレ」から「ツンボ」への変遷期における「ツンボ」の最初期用例として位置づけ得る。

2.2. 葡語の男性形と女性形

『葡日辞書』は南蛮通事の葡語学習のために編まれた対訳辞書という編纂指針を反映し、見出し語に名詞などの男性形と女性形を併記する例が散見する (図 3)。図 1 では葡語男性形 [home' mouco] に対し、倭語 [tçu'bō] が当てられ、葡語女性形 [molher mouca] に倭語 [uonnatcu'bō] が当てられている。この他にも葡語女性形の対訳倭語に倭語 [uonna] が付与されている例は、[ufubito (盗人)] (図 3c)、[curobō (黒坊)] (図 3d)、[Itoco (従兄弟)] (図 3e) がある。

なお、倭語「女」の綴りは [uo'na] (図 3b, 3e, 3h) と [uonna] (図 3c, 3d) の両方がみえる。このよ

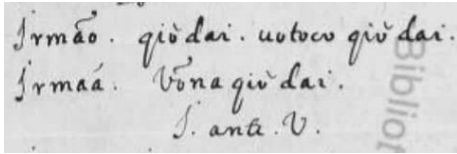
(a)



Filha. mufume. 娘 (24r-a9)

Filho. mufuco. 息子 (24r-a10)

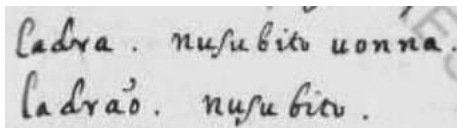
(b)



Irmã'o. qiōdai. uotoco. qiōdai. 兄弟 男兄弟 (31r-b9)

Irmã'a. Uo'na qiōdai. 女兄弟 (31r-b10)

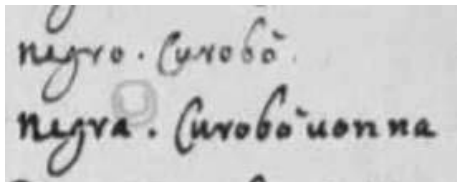
(c)



Iadra. nufubito. uonna. 盗人女 (32r-b3)

Iadrão. nufubito. 盗人 (32r-b4)

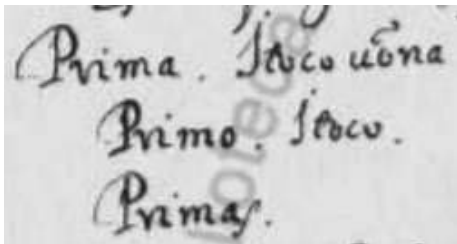
(d)



negro. Curobō. 黒坊 (52v-a11)

negra. Curobō. uonna. 黒坊女 (52v-a12)

(e)

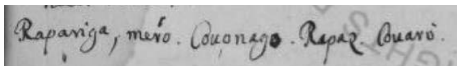


Prima. Itoco uo'na. 従子女 (80v-a7)

Primo. Itoco. 従子 (80v-a8)

Prima'.

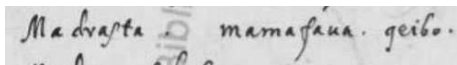
(f)



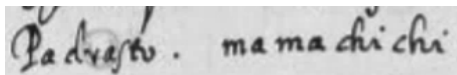
Rapariga merō Couonago Rapaz Couaro

女聾 小女 小童 (88r-a19)

(g)

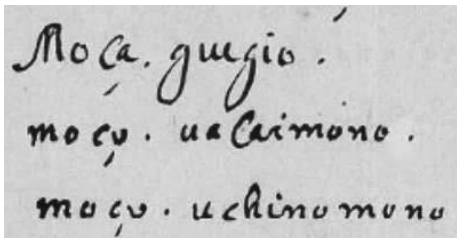


Madrafta. mama fāua. qeibo. 継母 (38r-a8)



Padrafto. mamachichi. 継父 (60v-a11)

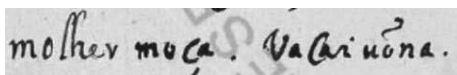
(h)



Moça. Guegio. 下女 (46r-b12)

moço. uacai mono. 若い者 (46r-b13)

moço. uchino mono 家の者 (46r-b14)



Molher moça. Uacai uo'na. 若い女 (46v-a15)

図3 『葡語辞書』にみる葡語の男性形と女性形

うな [n] と鼻音符 [̃] の揺らぎは『葡日辞書』全般に涉っており、現存『葡日辞書』が祖本ではなく写本である場合、書写者が複数に涉っている可能性も窺われる。

このように、見出し語に葡語の男性形と女性形が併記される中、葡語 [mouco] の女性形 [mouca] にも倭語 [uonnatçu'bō] が対訳倭語として記載されたものと考えられる。すなわち、倭語 [uonnatçu'bō (女聲)] にみるような [uonna] が付与された倭語語彙は、必ずしも『日葡辞書』などにみる婦人語 (小林 1999) として位置づけ得るわけではない。

3. 16～17世紀のポルトガル聾語彙史

岸本 (1999) は『葡日辞書』の編纂目的に関し、次のように述べている。

編纂の目的は外国人宣教師の日本語学習用と考えるよりも、南蛮通事のポルトガル語学習用と見なした方がよさそうである。『葡日辞書』はキ

リスト教布教を目的とした他のキリシタン資料と大きく性格を異にするということになる。(岸本 1999: 475)

『葡日辞書』にみる葡語 [mouco] は、『葡日辞書』以外のキリシタン版対訳辞書からは窺えない (末森・新谷 1995)。『葡日辞書』の編纂目的と、『葡日辞書』に葡語 [mouco] が載録された経緯はどのように関わっているのであろうか。本章ではポルトガルの様々な葡語辞書にみる聾語彙を遡及的に渉猟し、16～17世紀のポルトガルにみる葡語 [mouco] や [surdo] の位相を整理する。

3.1. 葡語関連辞書

(1) Academia das Ciências de Lisboa (ed.) (2001) *Dicionário da Língua Portuguesa Contemporânea de Academia das Ciências de Lisboa*. Editorial Verbo.

この辞書は現代葡語⁽⁶⁾の国語辞書に該当するものであり、[mouco] と [surdo] が共に見出し語として載録されている (図4)。また、[surdo-mudo] と

(a)

mouco¹, a [móku, -v]. *adj.* (Talvez do lat. *muticus* 'mutilado' ou do lat. *Malchus* 'Malco', antrop. <soldado a quem, no momento da prisão de Cristo, o apóstolo Pedro cortou uma orelha>). 1. *Fam.* Que não ouve ou que tem bastante dificuldade em ouvir. *Com a idade, está a ficar cada vez mais mouco. Não tinha coragem de ralar com a velhota atarantada e mouca que o obrigara a travar de repente. Até era uma sorte ser mouco, para não ouvir o que não queria.* 2. *Region. (Mad.).* Diz-se do mar que está calmo, silencioso. *fazer orelhas moucas, Fam.,* fingir, alguém, que não ouve o que não lhe convém; não querer prestar atenção ao que se diz. *Dim. mouquinho, -ito.* **mouco**², a [móku, -v]. *s.* (Talvez do lat. *muticus* 'mutilado' ou do lat. *Malchus* 'Malco', antrop. <soldado a quem no momento da prisão de Cristo, o apóstolo Pedro cortou uma orelha>). *Fam.* Pessoa que não ouve ou que ouve muito pouco. = **SURDO**. *Ele bem gritava e tentava a todo o custo explicar o que queria, mas a pobre da mouca não o entendia.*

(b)

surdo¹, a [súrdu, -v]. *adj.* (Do lat. *surdus*). 1. Que não ouve ou ouve mal; que perdeu total ou parcialmente o sentido auditivo. *Ficou totalmente surdo depois do acidente.* 2. Que não está interessado em ouvir; que não atende a razões ou pedidos. = **IMPASSÍVEL**, **INSENSÍVEL**. *Permanecia surda aos conselhos dos amigos.* 3. Que tem um som abafado, fraco, pouco audível. *Foram acordados por uma pancada surda na porta. Voz +, voga + surda.* 4. Que é elaborado em silêncio; que é preparado em segredo. 5. Que tem pouco brilho. *Tintas surdas.* 6. Que não se manifesta claramente; que é pouco pronunciado. = **VAGO**. *Deixou-se lentamente dominar pela surda cólera que nutria contra o rapaz.* 7. *Fonét.* Que é produzido sem vibração das cordas vocais. *Fonema +, consoante + surda. fazer-se surdo, Fam.,* cerrar os ouvidos; não querer ouvir ou atender pedidos. *ficar surdo, Fam.,* o m. que *fazer-se surdo. ser surdo como uma porta, Pop.,* ouvir muito mal; não ouvir nada. *Adv. surdamente (V.).* **surdo**², a [súrdu, -v]. *s.* (Do lat. *surdus*). 1. Pessoa que perdeu total ou parcialmente o sentido auditivo, que ouve mal. *Falava-lhe muito alto porque era um pouco surdo.* 2. Pessoa que não quer atender a razões, a apelos. *conversa + de surdos. diálogo + de surdos. falar a um surdo, falar com uma pessoa intransigente; falar a quem não atende razões nem pedidos. gritar como um surdo, Pop.,* gritar muito; falar muito alto. **surdo-mudo**¹, **surda-muda** [surdumúdu], [surdemúde]. *adj.* 1. Que não ouve e não fala simultaneamente. *Criança surda-muda.* 2. Que revela indiferença, insensibilidade. *Pl. surdos-mudos, surdas-mudas.* **surdo-mudo**², **surda-muda** [surdumúdu], [surdemúde]. *s.* Pessoa que não ouve e não fala simultaneamente. *Pl. surdos-mudos, surdas-mudas.*

図4 『Dicionário da Língua Portuguesa Contemporânea de Academia das Ciências de Lisboa. Editorial Verbo』にみる聾語彙

(a) [mouco] (Academia das Ciências de Lisboa 2001: 2538-2539)、(b) [surdo] (Academia das Ciências de Lisboa 2001: 3488)。

いう聾語彙もみえる。

現代葡語 [mouco] に該当する現代スペイン語は [moco] であるものの、『鼻水、粘液』のような意味に留まり、『聴覚障害』を意味する語として用いられることはない。

(2) Guedes, F. (2008) *Dicionário Verbo Língua Portuguesa: com o apoio do Ministério da Educação*. Editorial Verbo.

この辞書は中学生のために編纂されたものであり、[mouco] と [surdo] が共に見出し語に載録されている。また、現代葡語の語彙頻度統計資料をみると、[mouco] の語彙頻度は17,000位程度であり、現代葡語においてもほとんど使われることのない語ではないことが窺われる。

(3) Silva, A. de M. (1789) *Diccionario da Língua Portuguesa*.

この辞書は18世紀後期に編纂されたポルトガルの国語辞書であり、[mouco] と [surdo] の両方が見出し語に載録されている(図5)。^(a) [mouco] は [surdo] を援用した説明に留まっている。

(4) Bluteau, R. (1712) *Vocabulário Português, e Latino: Teoria metalexigráfica, fontes e recepção*.

この辞書は18世紀前期に編纂されたポルトガルの国語辞書であり、[mouco] と [surdo] の両方が見出し語に載録されている。^(b) [mouco] は [surdo] を援用した説明に留まっている。もっとも、この辞書に [mouco] が採録されていることから、18世紀初

(a)

MOUCO, adj. furdo, ou algum tanto furdo.

(b)

SURDO, adj. o que não tem o sentido de ouvir. § Que senão ouve, ou sente v. g. „furdas vozes; á voga furda, i. e. remando de forte que se não ouça o bater dos remos. Naufr. de Sepulv. f. 97. v. e Farros. § Lima furda, que se não ouve. § Que não faz círculo. Araes 7. 23. „com furdos azorragues açoita a má consciencia ao impio. § Pela furda se vai o Reino perdendo, i. e. insensivelmente. Amaral c. 12. „a armada vai furda „sem rumor. 2 Certo de Din f. 422.

図5 『Diccionario da Língua Portuguesa』にみる聾語彙

(a) [mouco] (Silva 1789: 100)、(b) [surdo] (Silva 1789: 433)。https://mordigital.fcsh.unl.pt/

期には既に [mouco] が広く用いられていたことが窺われる。

(5) Colominas, J. (1980) *Diccionario Crítico Etimológico Castellano e Hispánico*. Gredos Editorial S. A.

この辞書はスペイン語を中心にイベリア半島のロマンス語全般を扱った語源辞書である (https://archive.org/details/diccionariocriti0000colo)。[mouco] は [mocho] の項目を見よと指定されており、[mocho] は、『先が欠けた』とか『髪を短くした』というような意味が示されている。

(6) Nascentes, A. (1966) *Dicionário Etimológico Resumid*. Instituto Nacional do Livro.

この辞書は葡語の語源辞典のうち比較的古いものである。^(c) [mouco] の項には『De etimologia obscura』と記されている。

(7) Cunha, A. G. da (1986) *Dicionário Etimológico Nova Fronteira da Língua Portuguesa*. Editora Nova Fronteira.

この辞書は葡語の語源辞典で唯一、信頼度の高いものである。もっとも [mouco] の項には『De etimologia obscura』と記されている。

(8) Cunha, A. G. da (1984) *Vocabulário histórico-cronológico do Português Medieval*. Casa Fundação Rui Barbosa. (http://medieval.rb.gov.br/)

この辞書は15世紀以前の中世葡語史料にみる葡語出典を編輯したものである。この辞書には [mouco] は載録されていない。^(d) (6) の『』と併せて考えると、ポルトガルにおいて [mouco] が [surdo] の類義語として用いられるようになった時期は16～17世紀である可能性が窺われる。

(9) *Real Academia Gallega* https://academia.gal/inicio

この辞書はスペインのガリシア州(図8)で話されているガリシア語の辞書である(黒澤 2009、柿原 2016、寺尾 2021)。この辞書にはガリシア語 [mouco] が見出し語に載録されている(図9)。ガリシア語 [mouco] は『口数が少ない』という意味を持ち、聾語彙よりは、聾語彙との関連性が窺われる。また [moca] は『人や物を嘲笑する言葉や一連の言葉、身振り、行動』という釈文が附されている。

日本聾語方言地図(岡山 1935、末森 2018e)では、

(a)

Mouco. Surdo, ou algum tanto surdo. *Surdaster, sira, strum. Cic. Vid. Surdo.*

(b)

SURDO. O que não ouve. *Vid. Surdez.*
 Nicarcho, Poeta Grego, faz hũa linda descripção de hum Juiz, que sendo surdo, as partes também surdas, dizião de sua causa diante d'elle. Thomàs Moro a traduzio nestes versos Latinos:
*Lis agitur, surdusq̃ reus, surdus fuit actor;
 Ipse tamen Judex, surdus utroque magis,*
 Tom. VII.
*Pro a libus hic petit es, quanto jam mentis peractis,
 Ille refert, tota nocte mihi all a mola est.
 Aspicit hoc Judex, & quid contenditis inquit,
 At non utriusque est mater, utriusque alite.*
 Entre Jurisconsultos, Testemunhas surdo, & quando para algũa prova se allega com testemunhas autenticas, ou falecidas, que não estão em estado de responder às perguntas, se estivessem presentes. Siggon, Official de guerra no Exercito de Childeberto, Rey de França, ouvia tão pouco, que ainda que se gritasse em voz alta, não percebia senão hum som confuso. Chegando-se a S. Gregorio Turonense, para conferir com elle à puridade, recuperou naquelle instante o sentido do ouvir. Ha hũa surdez espiritual, muyto perniciosa, & he quando tapamos o ouvido às inspirações do Espirito Santo: *Noluit intelligere, ut bene ageret. Psalm. 35. vers 4.* Surdo. *Surdus, a, um.* Dando a etymologia deste nome, diz Fello, *Surdus, quali surditus, quia aures sordibus habet appletas,* Catullo diz, *Surdus, quasi se oridus, id est, sine ore, ou aure.* Aurium, ou audiendi sensu carens, tri, omni gen.

Surdo, & cego. *Oculus, & auribus captus, a, um. Cic.*
 Algũa coisa surdo. *Surdaster, sira, strum. Cic. Suburdus, a, um. Quint. Surdulus, a, um. Ex Plaut.*
 Fazerle surdo. *Obsurdere. Cic.*
 Fazer surdo. *Vid. Enturdecere.*
 Este som fez a gente surda. *Hoc sonitu applet aures hominum obsurdnerunt. Cic.*
 Quando se vay alguem enturdecendo. *Ubi gravius aliquis audire cepit Celsus.*
 Vós vos fazeis surdo. *Simulas, ou fingite non audire, surditatem simulas,* ou com Seneca, *Surdum te praestas.*
 A gente, que vive perto do lugar, a q̃ chamão Catadupas, donde se despeñha o Nilo de montes altissimos, he surda por causa do grande estrondo. *Ubi Nilus ad illa, quae Catodupa nominantur, praecipitat ex altissimis montibus, ea gens, quae illum locum accolit, propter magnitudinem sonitus, sensu audiendi caret. Cic. Celsus.*
 Xxxij diz

diz *Audiendi usu carere.*

Me-yo surdo *Semifurdus, a, um. Ex Cic.*

Surdo de hum ouvido. *Aure altera captus, a, um. Ex Cic. & Plin.* que diz, *altero lumine orbus.*

Adagios Portuguezes do Surdo.

Não ha peor surdo, que o que não quer ouvir.

Dize ao doudo, mas não ao furdo.

Nem barbeyro mudo, nem cantor surdo.

Por de mais he a citola no moinho, quando o moleyro he furdo.

Tão furdo he aquelle que ouve, & não entende, como aquelle que não ouve.

Des que me não pagão, furdo me faço.

Lima furda. *Vid. Lima.* Polvora furda. *Vid. Polvora.*

Voga furda. *Vid. Voga.*

Remo furdo. (Naquella noyte vierão a remo *Surdo*, para cortar as amarras. Barros, Dec. I. fol. 71. col. 1.)

図6 『Vocabulario Portuguez, e Latino: Teoria metalexiconográfica, fontes e recepção』にみる聾語彙

(a) [mouco] (Bluteau 1712: 607)、(b) [surdo] (Bluteau 1712: 797-798)。https://purl.pt/13969/4/

(a)

Mouco. De etimologia obscura.

(b)

Surdo. Do lat. *surdu*, através de um arc.
**sordo* (cf. o esp. *sordo*, o galego *xordo*,
o it. *sordo*, o fr. *sourd*). Na Beira-Alta e
em Trás-os-Montes ainda há uma forma
sordo. O *u* breve terá dado *u*, talvez por
influência da palavra correlata *mudo*.



図8 スペイン・ガリシア州

図7 『Dicionário Etimológico Resumido. Instituto Nacional do Livro』にみる聾語彙

(a) [mouco] (Nascentes 1966: 503)、(b) [surdo] (Nascentes 1966: 706)。
<https://archive.org/details/DICIONARIOETIMOLOGICORESUMIDO/DALINGUAPORTUGUESAANTENORNASCENTES/mode/2up>

(a)

mouco, mouca adxectivo

[Persoa] que fala pouco, de poucas palabras.

([人に関して言うときに] 口数が少なく、言葉も少ない。)

Era un home mouco, non dabas tido unha conversación con el.

(彼は無口（無言）な男で、あなたは彼と会話をしたことがない。)

(b)

mocho, mocha

Para todas as acepcións SINÓNIMO

adxectivo

1 [Animal] falto dun ou dos dous cornos, dunha ou dúas orellas, ou do rabo.

([動物] 片方または両方の角、片方または両方の耳、尾がない。)

Na corte ten varias vacas *mochas*. CONFRÓNTESE moguelo

2 Que non ten ou que perdeu un extremo ou a punta. Necesita un afialapis porque ten un lapis mocho. Quedou durmido debaixo dunha árbore *mocha*.

(c)

moca

substantivo feminino Palabra ou conxunto de palabras, xestos ou accións cos que se ridiculiza unha persoa ou cousa.

(人や物を嘲笑する言葉や一連の言葉、身振り、行動。)

Non fagades *moca* dese pobre miserable.

図9 『Real Academia Gallega』にみる聾語彙

(a) [mouco]、(b) [mocho]、(c) [moca]。邦訳は deepL による。

聾語彙と啞語彙の両方に載録されているものがいくつかある。ガリシア語と現代葡語の共通祖語に啞語彙に属する [mouco] 祖語が生まれたあと、ガリシア語では啞語彙に属するような語義が維持されてきたのに対し、葡語では聾語彙に属するような語義に変化した可能性もある。

(10) Arias, X. L. G. (2021) *Diccionariu Etimolóxicu de la Llingua Asturiana mocu sordu OPT*. University of Oviedo.

この辞書はスペインのアストゥリアス州 (図10) で話されているアストゥリアス語の国語辞書である (川上 2013、黒澤 2014)。この辞書には [mouco] と



図10 スペイン・アストゥリアス州

(a)

mochu, a, o
 <motsu/a [y Tb]. +muchu/mocha [Mi]. mochu/mocha [CI]. +muchu/mocha/mocho [Ri]. +muchu/mucha [CI]. mocha [Os. Ay. Pr]. mouchu [An. Tor].>
 Cast. *mocho* [CI]. Ensin cuernos [Lln. Os. Cb. Cp (= moca = morra). Ac. Mi. Ri. Ar (la cabra = moca). Qu. Tb. Sm (la vaca). Pzu. PSil. As (carneru). SI (oveyes). Pr (= moca). Tox. Tor. Mar (la cabra)]. Que perdió un cuernu [CI. An (= moucu) Arm]: *Mancouse'l buei mouchu* [An]. Ensin dalgún cuernu [AGO (el bue)]. Cast. *romo* [Lln]. 2. Ensin pendientes (la muyer) [Pr]. 3. Ensin la guía (un árbol) [Pa. Mar]. Ensin cañes [Tox]. Que-y falta un cabu [Cp]. 4. Ensin aresta [Mar (el trigo)]. 5. Sosu [Mi]. 6. Con perpoco o nada (una casa, una vaca, una maniega ensin ases) [Ay]. 7. Que nun foi engañu sexualmente pola pareya {fam. ensin cuernos} [Tb]: *El miou home morró motsu* [Tb]. // *Cabra mocha nun tien cuernos* dizse p'amosar una evidencia [PSil]. // *Cepa mocha* 'cepa ensin sarmientos' [Cn (V)]. // *Carneiru monxu* 'carneru mochu, ensin cuernos' [Busmente (Cv)]. *monxa* '(cabra) mocha' [Bus (Oc)]. // *Febreru mocho, dies ventiocho* [LC]. // *Pan mochu* 'pan ensin corteza' [Tox].

de la segunda tierra que fue de Alfonso González Mocho 1347(or.) [SIL/286]
 - *Baca llamada Pardina (...) baca mocha de ambos cuernos* 1597 [(Comuña): 166]
 - *Baca bermeja mocha de entrambos cuernos* 1597 [(Comuña): 166]

(b)

mocu, a, o
 <moucu/a [Tb. Sm. Pzu. PSil. An. Pr. Tox. /Eo/]. moucu [Cn (MG). Cv. As (Oc)]. moca [Lln. Os. Pa. Sb. Cb. Ca. Cp. Ay. R]. mouca [Bab. Cd. Oc]. moicu/moica [Qu]. +mucu/moca[Ll]. +mucu/moca/moco [Ri]. // // //mogo/a [LLA]. moga [Ar].>
 Ensin cuernos [Os. Cl. Cp. Ay. Pr. Tox]. Esmocháu (un animal vacunu) [Sm. Md. Cv]. 2. Que-y falta dalgún cuernu [Am. Cg. Ay. Qu. Tb. Sm. Cd. /Eo/. LLA]: *Nun viendas la vaca mouca; la que nun ta mouca val pa carne* [Tb]. Que-y falta ún de los cuernos (la vaca) [Ca]. Ensin un cuernu [Lln. Pa. Cb. Sb. Mi. Ay (vaca). Ll. Ri. Bab. Pzu. PSil. Cn (MG). An. Oc. R] o dos (un animal vacunu) [Pr]. Con un cuernu disminuía [Tb]. Con un cuernu más altu qu'otru (la vaca) [Ar]. 3. Que nun oi bien [As]. 4. Ensin pendientes (una muyer) [Pr]. 5. Idiota, imbécil [Lln]. " {Persona} de poco fuste o categoría" [Lln (S) = mocarru]. // *Non mos faltará un güe mocu y otro que tire pocu* dizse cuando se va de mal en peor [LC].

de Martín mouco en lugar nombrado a la peral de Villarin /S. Andrés de Espinareda 1283 [STAAFF/165]
Johan Perez dicho Moca {Nun sabemos si se refir a *mocu* o a *mocu*} e *Tomas Perez pelliteros Fernan Rodriguez pedrero* 1311(or.) [SP-I/382]
 - *Una baca bermeja grande moca con una xata de antaño* 1570 [(Comuña): 113]
 - *Otra vaca que se dize Moca* 1573 [(Comuña): 125]
 - *Baca Escura moca de un querno* 1597 [(Comuña): 166]

図11 『Diccionariu Etimolóxicu de la Llingua Asturiana mocu sordu OPT』にみる聾語彙

(a) [mochu] (Arias 2021: 792)、(b) [mocu] (Arias 2021: 794)。

いう語形の見出し語はない。しかし、アストゥリアス語 [mochu, -a, -o] (図11a) は、《角が一本欠けた、(家や人が) 完全であるのにちょっと足りない状態》という説明があり、アストゥリアス語 [mocu, -a, -o] (図11b) は《角が一本欠けた、(家や人が) 完全であるのにちょっと足りない状態》などに加えて《耳が聞こえない、耳のよく聞こえない》という釈文が附されている。アストゥリアス語 [mocu] にみる様々な意味は (5) にみる [mocho] の語源とも符合する。ただ、[mocu] の語源は不明とされている。

アストゥリアス語 [mochu] はスペイン語 (カスティーリャ語) 由来であり、アストゥリアス語 [mochu] / [mocu] と、スペイン語 [mocho] や葡語 [mouco] は何らかの関連性があるものと考えられる。

3.2. キリシタン版にみる葡語聾語彙と倭語聾語彙の言語接触

岸本 (1999) は『葡日辞書』にみる葡語と倭語の歴史言語学的考察ないし社会言語学的考察に関し、次のように述べている。

『葡日辞書』はイエズス会式ローマ字綴りの規範から外れた表記があり、それらは編者や成立年代に関する手がかりとなる一方、公的な性格をもつ刊本では表面化しにくい当時の言語事象を示している可能性がある。(岸本 1999 : 465)

この辞書はポルトガル語資料でもあり、正書法がゆれていた当時における、編者の表記意識を知るための資料ともなりうる。(…)ポルトガル語の綴り方を調査することによって、日本語に対しても異なった見方が生じうると考えられるからである。(岸本 1999 : 467)

いわば、葡語と倭語の言語接触を記述することにより、葡語と倭語の言語接触が葡語の変遷ないし倭語の変遷にどのような影響を及ぼしたのかを可視化することができる。

キリシタン版対訳辞書の中でも代表的なものとして知られている『日葡辞書』は葡人宣教師の日本語学習のために編まれた対訳辞書であり、当時の日本で用いられていた様々な倭語を網羅的に載録する指針の下に編まれている。したがって、『日葡辞書』にみる倭語聾語彙が多岐に涉っているのに対し、対訳葡語は[surdo]ないし[surdo]の活用形に留まっている(末森・新谷 2015)。

一方、『葡日辞書』は南蛮通事をはじめとする日本人の葡語学習のために編まれたものであり、17世紀当時のポルトガルないし日本にいる葡人宣教師たちの間で話されていた葡語を載録する指針がたてられたであろうことは想像に難くない。すなわち、『葡日辞書』では他の聾語彙よりも新しく口語の色合いが濃いものと考えられる葡語[muco]と倭語[tçu'bō]が対応づけられている。ここに17世紀に日本人の葡語学習のために編まれた対訳辞書にみる葡語聾語彙と倭語聾語彙の言語接触事象の特性が窺われる。

織豊時代から江戸時代初期に渉る中近世移行期の日本では、南蛮貿易などによる南蛮諸国と日本の交易は、当時の葡語と倭語の言語接触をもたらしした。現在の日本語語彙体系には、今なおその残滓が窺える。しかし、倭語の聾語彙や啞語彙に葡語やスペイン語が借用語として取り込まれることはなく、昨今

の日本語聾語彙にみる英語由来の借用語「デフ」とは大きな違いを示している。

刊本『葡日辞書』の[S]の部に葡語[surdo]が載録されていた場合、どのような対訳倭語が用いられていたかは想像の域を出ないものの、[tçu'bō]ではなく[mimixij]ないし[qicazu]が用いられた可能性も考えられる。

岸本(1999)は『葡日辞書』の編纂者に関し、次のように述べている。

日本人ならばfとpを混同することはないであろうから、編者は外国人であった可能性が高い。(岸本 1999 : 465)

シーボルトの記述に最も近いと思われるクリストヴァン・フェレイラ(? — 1652、稿者註)について、Cieslik(1974)に基づいて述べておきたい。フェレイラはポルトガルリスボン近郊の生まれで、1609年に長崎入りし、有馬セミノリヨで日本語を学んだ。(岸本 1999 : 477)

Cieslik(1974, 1986)はフェレイラがリスボン郊外の村で生まれ、コインブラの修道院で教育を受けたことや、フェレイラが江戸時代初期の南蛮医学にも関わっていた可能性に言及している。フェレイラが『葡日辞書』の編纂者であるかどうかは不明であるものの、『葡日辞書』の編纂者が17世紀の日本にみる聾女性(ないし啞女性)を見かけることはあったであろう⁽⁷⁾。

また、16世紀後期から17世紀前期に渉る中近世移行期(=室町時代後期・織豊時代・江戸時代初期)の日本において、キリスト教(カトリック)の宣教に携わった人たちの中には盲人もいたことが知られている(沖浦 2016)。『葡日辞書』の編纂者にとっては、葡語[muco]をはじめとする障害関連語彙は、けっして遠い世界のモノではなく、むしろ日常生活における身近な言葉だったのではなかろうか。

4. おわりに

本稿では葡語学習をはかる日本人のために17世紀

に編まれた『葡日辞書』にみる聾語彙を編輯し、葡語聾語彙と倭語聾語彙の言語接触を葡語聾語彙史および日本聾語彙史に連関布置し、日本聾語彙史に資した。

昨今は中古中世日本史料や近世日本史料にみる障害関連語彙を編輯し、日本語の障害関連語彙および障害関連概念の変遷を可視化する試みが増えている。しかし、キリシタン版の葡語やスペイン語にみる障害関連語彙の編輯および中近世移行期日本にみる障害関連語彙との相互作用を可視化する試みはいまだ等閑に附されている。またキリシタン版に限らず、15～17世紀の東アジア諸国にみる障害関連語彙と中近世移行期日本にみる障害関連語彙の相互作用も、外国語と倭語の言語接触の射程に捉えていくことが望まれる。

謝辞

本稿の執筆にあたり、東京外国語大学名誉教授黒澤直俊先生には貴重な資料の提示および多大なる指導を賜りました由、深くお礼を申し上げます。

註

- (1) 本稿では「聾」は手話言語を第一言語とする聴覚障害(者)を指し、「聴覚障害」は音声日本語ないし書記日本語を第一言語とする手話習得聴覚障害(者)を指すものとする。同様に英語[Deaf]は「聾」に、[deaf]は「聴覚障害」に該当する。すなわち[d/Deaf]は「聴覚障害/聾」と邦訳し得るものである。
- (2) 本稿では、『葡日辞書』という通称に倣い、「葡語」という表記を用いる。
- (3) 本稿では、中近世日本語を「倭語」とし、現代日本語を「日本語」と表記し分けることにする。
- (4) 岸本(1999)は『葡日辞書』の体裁に関し、『*Biblioteca Apostolica Vaticana*: Estr. Or. 19 このローマのヴァチカン使徒図書館にある写本資料、ポルトガル語・日本語対訳辞書を以下『葡日辞書』と呼ぶ。現在、このヴァチカン図書館本が唯一の伝本として知られる。(岸本1999:459)(…)『葡日辞書』の本体は(…)革製の匣に収められている。匣の上には、金箔でラテン語の書名が刻まれている。*Vocabularium / Lusitanico-japonicum / a patre Joanne conscriptum / qui in Japonia martyrium / passus est*.〈日本で殉教した神父ヨハネスが書いたポルトガル語——日本語語彙集〉(岸本1999:459)(…)なお、この辞書は転写本の可能性がある。

それは、文字の太さや筆勢のちがいでなく小文字のqの書き方の異なる箇所があることや、次のように一行下の文字を間違えて写し、訂正したと見られる箇所がいくつかあるためである。(岸本1999:460)」と述べている。

- (5) 末森(2018e)は[mimi-tsubure(耳潰れ)]が音韻変化により[tsumbo(ツンボ)]に変化した可能性を詳らかにしている。
- (6) 現代葡語は主に、ポルトガルのほか、ブラジルや旧ポルトガル植民地で用いられているものの、ポルトガルで用いられている葡語とブラジルで用いられている葡語には様々な面で相違が見受けられる。本稿では現代葡語と言う場合は、ポルトガルで用いられている葡語を指すものとする。
- (7) 16世紀にシナ大陸を訪れた宣教師がしたためた本『十六世紀華南事物誌：ヨーロッパ最初の中国専著』には、「盲人の女は売春婦になる」という行がある。

参考文献

- 岡山準(1935)「日本聾啞史稿」『東京聾啞学校紀要』2:1-36.
- 沖浦和光(2016)「琵琶法師ロレンソ、盲人ダミアンによる下層民衆への布教」『宣教師ザビエルと被差別民』筑摩書房:185-189.
- 柿原武史(2016)「少数言語回復政策の困難:スペイン・ガリシア自治州で進む脱ガリシア語化と言語権」『アカデミア』12:209-220.
- 川上茂信(2013)「ガリシア・アストゥリアス語の言語帰属問題を巡って」『語学研究所論集』18:225-244.
- 岸本恵美(1998)「写本『葡日辞書』における「j」の使用」『京都大学国文学論叢』1:1-12.
- (1999)「解説」京都大学文学部国語学国文学研究室編『ヴァチカン図書館蔵 葡日辞書』京都大学文学部国語学国文学研究室・ヴァチカン図書館・臨川書店:458-479.
- ・白井純(2022)『キリシタン語学入門』八木書店.
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編(1999)『ヴァチカン図書館蔵 葡日辞書』京都大学文学部国語学国文学研究室・ヴァチカン図書館・臨川書店.
- 黒澤直俊(2009)「ポルトガル共和国の言語状況と北東端地域における少数言語の存在」『平成18-20年度科学研究費補助金「拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」研究成果報告書』東京外国語大学:225-244.
- (2014)「ポルトガル語・アストゥリアス語」『語学研究所論集』19:229-243.
- 小林千草(1999)「『日葡辞書』の『婦人語』:言語生活史的考察」『成城大学紀要』26:1-39.

- 斎藤博 (2001) 「ヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』所収日本語の語彙的特徴」『研究紀要』8: 81-94.
- 末森明夫 (2015) 「『キリシタン版対訳辞書群』における聾啞関連語彙」補遺」『聾史研究』2: 3-21.
- (2018a) 「古代・中世日本の仏典音義における聾啞吃語彙」『聾史会報』55: 12-14.
- (2018b) 「『聚分韻略』諸版の聾啞吃字彙における字訓字音の変遷」『聾史会報』55: 15-24.
- (2018c) 「『医心方』における聾啞語彙」『聾史会報』56: 11-20.
- (2018d) 「日本古代仏教説話集における聾啞語彙」『聾歴史研究』76: 33-39.
- (2018e) 「『聾啞方言地図』の布置：聾啞方言の音韻変化および概念編制」『歴史言語学』7: 1-16.
- (2020a) 「中古中世字書における聾啞吃字彙の受容と変容：聾概念と啞概念の独立性、啞概念と吃概念の連続性」『ろう教育科学』62 (1): 13-24.
- (2020b) 「日本聾啞教育史の新たな地平と非近代主義：アクターネットワーク論と存在様態論による徳川時代の啞と仕形の再解釈」『社会学評論』71 (3): 411-428.
- (2023) 「刑法と治罪法にみる聾啞語彙」『聾啞史会報』74: 35-39.
- (2024) 「中古中世日本医書にみる聾語彙」『歴史言語学』(投稿中).
- ・新谷嘉浩 (2015) 「キリシタン版対訳辞書群における聾啞関連語彙」『国語語彙史の研究』34: 261-278.
- ・高橋和夫 (2016) 「聾啞概念編制史の地平：論文『日本聾啞史稿』の考察を通して」『歴史言語学』5: 39-53.
- ・高橋和夫 (2017) 「狂言台本における聾啞語彙表記の変容」『国語語彙史の研究』36: 193-208.
- ・高橋和夫・Tijsseling, C. (2019) 「洋学資料における『態』概念の照射」『手話学研究』28 (2): 34-37.
- 寺尾智史 (2021) 『ミランダ語が生まれたとき：ポルトガル・スペイン辺境における言語復興史』三重大学出版会.
- 森田武 (1975) 「日葡辞書解説上の諸問題」『国語学』100: 20-35.
- 安田章 (1991) 「規範性への接近」『国語国文』60 (1): 1-15.
- 山下恵理 (2015) 「deafness 論の可能性へ：ろう文化論を聞こえない身体から考える」『年報カルチュラル・スタディーズ』3: 173-187.
- Cieslik, H. (1974) The Case of Christovão Ferreira. *Monumenta Nipponica* 29 (1): 1-54.
- (1986) 〈フェレイラと日本の医学〉「クリストヴァン・フェレイラの研究」『キリシタン研究』26: 143-147.
- Norri, Juhani (2016) Dictionary of Medical Vocabulary in English, 1375-1550: Body parts, sicknesses, instruments, and medicinal preparations. London: Routledge.
- Rose, M.L. (2006) Deaf and Dumb in Ancient Greece. Lennard, J. (ed.) *The Disability Studies Reader*. Routledge: 17-31.